

吊いの場をひらく：沖縄戦体験者の家族の ナラティブを通して

山本，真知子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

131

(終了ページ / End Page)

174

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025478>

吊いの場をひらく

—— 沖縄戦体験者の家族のナラティブを通して ——

山 本 真知子

生者は自ら異界へと接近し巻き込まれていくことによって、痛みの身体感覚を体験して共有し、亡霊の来歴を記憶する身体となつて、亡霊の異界からこの世の日常世界へと帰還していくことになる。亡霊のシグナルを感知し、その訪れを身体を開いて迎え入れ、亡霊の痛みに感応して、その語りを耳を澄まして聴き取り、亡霊の宿る異界を体験すること——それが吊いとなるだろう。

(川村、二〇一三：二五六)

1. はじめに…弔いをめぐる関係について

弔うという行為は、死者のもとを訪れる弔問者を主体とし、そこに弔われる死者と、弔問者と死者を媒介する遺族・喪主を加えた三者の関係によって成り立つものとして考えられてきた。だが冒頭の一節にあるように、川村邦光は著書『弔い論』（二〇一三）で、死者の生きる場に巻き込まれていくなかで感知される痛みを媒介し、死者の声に耳を傾け記憶していく営みとして弔いを縁取りなおしている。そこにおいて、生者はだれであろうと立場や関係を問わず、死者に訪れられ、歓待される。つまりこの歓待の関係は、弔いにおいて前提とされている主客の関係を逆転させ、生者に呼びかけ語りだす能動的な主体として死者を出現させるのである（二〇一三：一七）。別の視点から見れば、それは亡霊が自らの生きた証を残すべく、生者との対話を求めて語りつづける姿として映ることだろう。亡霊にとって、弔いの場は自ら生きていることを証立てる場であり、弔われるということは、すなわち証言の場に立つことを意味するのだ。

このように、亡霊たちはあの世とこの世を行きつ戻りつしながら語りつないできた。しかしながら、死者は生者によって「語られる対象」とされ、饒舌に代弁されることによって、沈黙を余儀なくされつづけてきたのではないだろうか——このことを、川村は問題視しているのである（二〇一三：三二）。とくに敗戦後七〇年以上の年月が流れ、節目ごとに記憶の継承がお題目として掲げられるな

かで、戦争体験はくりかえし引用されてきた。戦争の記憶を語ることばであふれているにもかかわらず、生きる死者たちは語りえない状況に封じ込められ、生の痕跡は捏造されていく。それは、死者にとって自らの生が否定された危機的な事態であり、亡霊となってあらわれる十分な理由になるであろう。

ここで、広島・長崎の原爆体験者らの援護活動にかかわるなかで、体験者の声を記録し、死者からことばを奪う状況性を聞き手の問題としてあぶりだした直野章子のことばを引用したい。

砕け散った自己のかけらを拾い集めて新たにつなぎ合わせながら、生き残りは体験を証言してきた。証言という行為を通して、死者を抱きしめながら、人間性を回復していったのである。それは、証言に耳を傾ける他者なくしては、成し得ないことであった。たとえ、遭ったものにしかわからないことであつたとしても、〈原爆後〉を語る言葉は他者に向けて送り届けられてきたのである。

（直野、二〇一五：二二五）

直野は、証言に耳を傾けるなかで、原爆の生き残りが「証言という行為を通して、死者を抱きしめながら、人間性を回復して」きた姿を目の当たりにしてきた。いうなれば、それは証言するとい

う行為に死者の存在が貼りついていることを目撃してきたということになるのではないだろうか。直野が記録してきたのは、肉体をもち、ことばを発することができる体験者たちの記録だが、そこにはたしかに亡霊の記憶が抱え込まれていたのだろう。しかしながら、原爆体験者らがことばを紡ぐとき、そこに居合わせるのは、はじめから「わかったような気になっている」聞き手たちだ（直野、二〇〇四・五七、六二・二〇〇八・一〇七・二〇一五・二一四）。直野がなぜこれを深刻に受けとめたのかといえば、そうした聞き手の態度が体験者たちを沈黙に追い込むことにつながってきたからである。そこに、死者を否定し、消し去ってしまうことへの危惧がにじんでいるようにも思われる。

こうした証言の場における問題——死者を含む戦争体験者が沈黙させられつづけてきたこと——を踏まえたうえで、語りえない状況に留め置かれた死者をどうしたら解き放つことができるのか考えてみたい。川村の弔い論に即して考えれば、亡霊の語りに身をひらき、死者が生前に経験した痛みに触れることによって、自らの身体感覚を媒介しながら記憶し、「亡霊の歴史を再歴史化」していくということになる（二〇一三・三八）。だが理屈の上ではそうだとしても、亡霊との対話の現場に身を置くという経験が、きちんと整理されたかたちで語られることはない。むしろそれは、高ぶる感情とともにあふれだすこともあれば、つぶやきやいいよども、混乱した言動や、沈黙のなかに沈められていることもある。まずは、理論化された弔いの営みを現場に差し戻して考える必要があるだろう。

そこで本稿は、川村の弔い論を参照枠として、沖縄戦体験者の故・伊佐眞三郎さんの家族のナラ

ティヴを記録していく過程を通して、弔いの場をひらくことを試みる。記憶の継承を第一義とするならば、家族から死者の経験聞きだすことによって、死者が生きた痕跡を歴史として書き起こせばいいのかもしれない。だがここで大事にしたいのは、亡霊に訪れた者たちが、傍らに身を置くという経験を通していかに記憶してきたのかという過程そのものを浮かび上がらせることだ。そのため、一人ひとりがどのように亡霊とともに生きてきたのかを追っていくことになる。

今回取り上げられる、伊佐眞三郎さん（一九三〇・二〇一九年、泡瀬生まれ、以下眞三郎さんと記す）は、米軍ヘリパッド新設・運用に対する座り込みによる抗議行動にかかわるなかで、幼少期に体験した沖縄戦の記憶を証言しはじめたことでも知られる、東村高江の住民である。わたし（筆者）は、二〇一五年に高江の座り込みの現場に訪れた際に眞三郎さんに出逢い、沖縄戦の体験を断片的に聞いたことがある。だが、当時すでに認知症が進行していたこともあり、詳しいことを聞くことができたわけではなく、沖縄戦によるPTSD（Post Traumatic Stress Disorder: 心的外傷後ストレス障害）を抱えているということも知っていたため、かれにとって過度なストレスになりうるインタビューは控えるようにしていた。だが調査のためではなく、運動へのかかわりのなかで眞三郎さんの自宅で食卓を囲み交流する機会があったときに、混乱した意味のわからない言動を何度か眼にしたことがあった。そのときに、そこに沖縄戦の記憶があふれだす瞬間、つまり最後の証言の場があらわれたように見えたのである。そのときの体験から、認知症とPTSDを抱えた眞三郎さんのふるまいや

つぶやきに込められたものはなんなのか、家族の視点から考えたことがある（山本、二〇一九）。本稿も眞三郎さんの経験を家族の視点からたどりなおすものではあるが、家族一人ひとりのなかに生きつづけるかれの記憶について語り、聞くインタビューという場を通して、一人の死をどう看取ったらいいか考えるものである点で、経験への向き合い方は大きく異なっている。

以下では、眞三郎さんも参加していたヘリパッド建設に対する抗議運動にかかわりながら、かれとともに暮らしてきた四人の家族の話が、取り上げられることになる。眞三郎さんにとって、反戦平和運動が沖縄戦の体験と無関係ではないということを考慮し、運動と暮らしの両方から眞三郎さんのことを見てきた家族にインタビューを依頼した。運動へのかかわりを重視したのは、かれがそれまでだれにも語らずにきた沖縄戦の記憶を語りだしたのが、座り込みのテントだったからだ——つまり、座り込みテントは、かれにとって記憶を語り伝える場でもあったということになるだろう。それに加え、運動のなかで沖縄戦体験者は一目置かれる存在であり、闇の部分には捨象されていくことが少なくない。運動のなかで築かれてきた沖縄戦体験者像に対抗するには、その傍らにいた者たちによって語りなおされる必要があると考えた。実際にインタビューを通して、四人の家族一人ひとりと一緒に眞三郎さんについて思いをめぐらせた時間は、わたしにとっても、いかに一人の死を受けとめていくかという問いを抱えながら、弔いの場をつくろうとする行為とかさなるものになったように思う。

では次節で眞三郎さんの生涯を振り返ってから、三節でかれの家族のなかに抱え込まれた眞三郎さ

んの記憶を取り上げ、四節で弔いの場についてあらためて考えることにしよう。

2. 伊佐眞三郎さんの生涯

まず、眞三郎さんの経験してきた痕跡をかれの家族へのインタビューに基づき記す。

一九三〇年、眞三郎さんは沖縄市泡瀬に五人兄弟の三男として生まれた。父は戦前に特攻警察に連行されて行方不明になり、兄二人は中国とサイパンでそれぞれ戦死した。戦争の影響で家族を失っていくなかで、眞三郎さんは沖縄戦の戦火を生き延びたのである。そこでかれが見ていたこと、経験したこと、一端を伝えるエピソードがある。空襲がつづいていたある夜のことだ。米軍の攻撃から逃げていたかれは、乳飲み子を抱えた母親が木の下にその子どもを置いて飛び出していったのを目撃する。しかし、当時一三歳のかれは自分が逃げることに必死で、その子どもを救い出すことができないままその場から去った。——かれは晩年、その子どものことを思い出しては、助けられなかったことを悔いながら、あのとみに見たその「子どもの眼が忘れられない」と訴えるようになったという⁽¹⁾。

残された兄弟のうち唯一の息子となった眞三郎さんは、母・マツさんによって後継ぎとしてだれよりも大事に育てられた。かれが生き延びられたのは、この母の執念あつてのことなのかもしれない。たとえば、子どものころから食事のときは「一番座で（ほかの女性たちとは）お膳の高さが違」った

り、妹たちに隠れてお菓子を与えられたり、かの女たちの分までご飯を食わせてもらったりと厚遇されていたようだ。とはいえ戦中・戦後の厳しい時代は食べるものが少なく、米軍基地に侵入してドラム缶に残っている食べかすを漁りに行ったり、近所で結婚式や葬式があれば必ずついて行ってお菓子をもったりしていたという。

ほかにも、志願兵になるための身体検査を受けたけれど、何の自覚症状もなかったにもかかわらず、トラコーマ（結膜炎）と診断され軍隊に入らずに済んだという話があるが、そのときに検査結果が不合格となったわけを、息子を手放したくなかった母が、裏で根回ししていたからではないかと考える家族もいる。⁽⁴⁾入隊できなかったかれは、沖縄で家族をまもるために疎開船「対馬丸」への乗船を踏みとどまった。しかし、戦地に行った先輩や友人たちだけでなく、対馬丸に乗った近所の人たちも帰ってくることはなかった。敗戦直後に親戚に会ったり近所を歩いたりしていたときに、かれは子どもを失った親たちから妬まれ、哀しみをぶつけられた。そこから、かれはなぜ生き残ってしまったのか自問するようになる。

成人した眞三郎さんは、近くに住んでいた一歳年下の喜美子さんと結婚し、⁽⁵⁾六人の子どもに恵まれた。メカに強かった眞三郎さんは、バス会社で運転手として働きはじめるも、労働組合の運動にかかり首になり、養鶏場やアイスクリーム販売など職を転々としたのちに、家具を中心に手掛ける木工所を開いた。そして施政権返還を迎える一九七二年、県外家具メーカーの進出を見越してトートー

メー（位牌）をつくりはじめる。^⑤

生活と仕事の傍ら、眞三郎さんは、共産党の黨員としても地道に活動してきた。選挙前になれば、自宅を事務所としてすすんで使わせ、チラシを折ったり配ったりすることにも積極的だった。だが、かれが住んでいた地域では自民党の地盤が強固に築かれていたため、共産党のチラシを配っていると「石を投げられた」り、「目の前でビリビリ破られた」りすることもあったという。^⑦それもあつてか、徐々に自らの手で配らなくなり、チラシを折ることに従事することが多くなっていた。これらの政治活動に加えて、党での活動には子どもたちとのつながりを維持するための場としての役割もあったようだ。仕事や党活動に専念するあまり子育てにかかわることが少なかったかれにとって、党主催のピクニックや赤旗祭りは子どもたちを連れて行く数少ない行事の一つだったという。^⑧

そして一九九〇年、機械音による近所迷惑の心配を抱えてきた沖縄市の木工所を山に囲まれた東村高江に移転し、長男と次男夫婦とともに同地に引っ越した。七〇歳を迎えて細かい作業が難しくなり息子に工場を譲ったころには、連れ合いの喜美子さんの認知機能の低下や徘徊がはじまり、施設に入るようになったため、かれは子や孫に支えられながら高江で一人暮らすようになった。

二〇〇七年七月、高江を取り囲むようにして六基の新たな米軍ヘリパッドがつくられることになり、その工事開始に伴い基地ゲート前ではじまった座り込みによる説明要求および抗議行動に、眞三郎さんも参加しはじめた。その座り込みに日々足を運び人々と集う時間をもつなかで、自らの沖縄戦

の体験をぼつりぼつりと語りはじめた。一四歳のときに出逢い、三線を教えてもらっていたという、ある「ネーネー（お姉さん）」たちのことは、そこではじめて語りだされることになったのである。当時、「集団自決」に関する教科書の記述から日本軍による強制を示す文言が削除されるということが問題となっていた——かれにとってネーネーの話は、記憶が書き換えられてしまうことへの恐怖から語りだされたのだろう。そのネーネーというのは、朝鮮から連行されてきた慰安婦の女性たちのことだった。三線を教わり、優しくしてもらったそのネーネーの股の奥が真っ赤になっていたこと、女将と呼ばれば料亭の二階に行かねばならなかったこと、そしてその二階に向かってベルトを外しながら順番を待つ日本兵が列をなしていたこと。それが、かれの目撃した慰安婦の女性にまつわる記憶として語られたものであった。ネーネーとの話はこうつづく。母親に遊びに行った先でのことを話すと、二度と行つてはいけないと言われ、さらに敗戦後に、親戚の男性が戦中に憲兵として朝鮮に行っていたときに女性たちを連れて来る仕事をしていたと聞いたかれは、三線をもう二度と弾くまいと折ってしまった、と。晩年、眞三郎さんはネーネーたちに会って謝りたいと言い、関係団体にかの女たちを探してもらったことがあったが、再会を果たすことはできなかった。

こうした座り込みの一方で、かれが楽しみにしていたのは、放課後に小学校前の自宅に集まってくる子どもたちとテレビを見て過ごす時間だった——それは子守りをしていたというよりも、かれが孤独や寂しさを紛らわせるために子どもたちに近くにいてもらっているように見えた。

ほかにも基地ゲート前までの道のりを一人歩きながら、タバコの吸い殻を拾い集める水源をまもるための活動を日課にしていた。周囲が仕事をどうしたら遅らせられるか、止められるかと頭を抱え、緊張感が漂うときでも、「タバコ拾って来たよー」とやって来るかれにその場の空気が和んだこともあった。

——二〇一九年十一月二五日、老衰により病院で静かに息を引き取る。享年九〇歳。亡くなる数カ月前までゲート前のテントでの座り込みに通い、そこでの交流を楽しみにしていた【図1】。

3. 家族にとつての記憶

ここまで、眞三郎さんの家族から聞いた話をもとに、可能な限り眞三郎さんを主語にして、その経歴を書き起こしてきた。本節では、日々生活するなかでかれと接してきた家族の視点からかれの生きてきた時間をたどりなおしてみたい。それは、前節での話を聞き出していくなかで語りだされた、それぞれのうちにいまも生きるかれの記憶でもある。

眞三郎さんが胸の内に秘めつつけてきた沖縄戦の記憶とそれにまつわる傷は、その傍らで生活して



【図1】伊佐眞三郎さんの遺影・位牌

(撮影：筆者，2020年1月29日)

きた人たちのうちにどのように降り積もってきたのだろうか。そして、痛みの記憶はどう変わっていくのだろうか。

3-1. 屋良洋子さん（長女、一九五二年生まれ）

屋良洋子さんは、眞三郎さんが「表と闇」の両方もちあわせていたという。ここでいわれている「表」とは「反戦平和を訴える建設的などころ」である一方で、「闇」というのは戦争体験にかかわるものにあたる。そうした「闇」を抱えた姿を見てきたかの女は、かれが死を迎えたことに安堵していた。

父親は長生きすぎたなと思う。でも、やっとそういう苦しみから解放されてよかったと思ってる。わたしたちがこれはもう手術や病気の治療とは違うから、それ（＝苦しみから解放すること）できない。「死」ということで清算できたわけ。もう苦しまなくていい。ある意味でほっとしている。⁽¹⁰⁾

洋子さんが触れた「闇」は、どんなものだったのか。まず語られたのは、「戦争を扱った映画を観て泣いていた」というものだった。かの女はその涙のわけを「自分の親・兄弟を思い出していた」のだろうと推測する。だが、それからひとしきりかれと親戚のことを話したのちに、「わたしたちは父

親のどれぐらい知っているか」と疑問を口にした。間髪入れず「いまだに、全部は知らない」とことばを継いだあと、なにか話すのを少しためらうようにしながら、「今ごろになって（……）どうかなと思う。責めてもしようがないしね」と一言断りを入れた。そして、「わたしも殴られたよ」と自らの経験を話しはじめたのである。

四〇五歳のときのことだ。毛糸のセーターのような服を着て寝ていたかの女は、暑くなってぐずりはじめたという。すると、眞三郎さんはかの女を急に外に連れ出し、家の傍にあった井戸に座らせて頭から水を浴びせたのである。

また、小学生のときに、冷蔵庫が家庭でつかわれるようになって間もないころ、冷凍室の金属板に手を置いていたら、そこにできた霜に手がくっついて離れなくなってしまったことがあったという。「恐ろしくなって、ぎゃー」と泣いていたかの女のもとにかれはやってきて、その手を叩いた。そのときのことをこう振り返る。

泣いてるのに、すぐ殴ったわけ。だから、そういう子どもの泣き声に対する過敏な反応だったのか。これはわたしのミステイク、でもないし、わからないから。（でも）そこで処置をするとか、声かけをするとかっていうのは一切なかったの。いきなりバシャーって叩かれて。余計わたしパニクって。それで痛みが倍増したわけ。で、あとからばーちゃんが、来て、なんやかんやして

たら、なんで自分が殴られたんだろう、悪いことしたのかなーと思つて。⁽¹⁾

かの女によれば、眞三郎さんは泣き声を嫌っていた。そしてそれは、沖縄戦のときに「赤ちゃんが死んだのを見てるから」、それを思い出していたのかもしれないという。

こうした自らの経験を話したあとでかの女が「一番の被害者」として言及したのが、三歳下の長男であった。長男は「成人して、結婚して、親になっても、それを乗り越えられない、精神的に闇ができていく」という。かれが眞三郎さんから受けたのは、「体罰」というよりも「無視したり、厳しく言ったり」することによつて精神的な苦痛が強いられるものであつたそうだ。わたしには、そうして長男の置かれた状況を話すかの女が、眞三郎さんとの関係において抱えつづけることになつた自分（たち）の傷に思いを馳せているように見えた。

長男が溜め込んだストレスは、さらに自分より弱い者たちに向けられるようになっていった。洋子さんが知っているだけでも、かれが次男・真次さんをけなすようにして「うふそーやー（間抜けだなー）」とか「ふらーぐわー（バカだなー）」とか言つたり、かれにいじめられた「近所の女の子」の親が「苦情」を言いに来たりしていたことがあつた。現在、かれは離婚し独り身となつており、二〇代からの「飲酒癖」によつて仕事も生活もままならない状況だという。

そんなかれを、洋子さんは見捨てようとは思はない。眞三郎さんが「長男（戦死した兄）の代わりに

いろいろ犠牲を払って」やってきたことが、自分の息子・長男との関係に影響しているかもしれない
 と思っ
 ているからだ——かの女はそれを沖縄戦による「PTSDの二代目」と呼ぶ。看護師でもある
 かの女は、眞三郎さんのことを少しでも理解するために医学書を読み漁るなど「学習」しつづけてき
 きた。そうして「こういうことかー、たぶんそうだったろうなー」と少しずつ察しがつくようになって
 きたという。それは、医学的な知識を吸収することを通して自分を納得させていくプロセスでもあつ
 たに違いない。

洋子さんがいま、その弟が抱えている問題に寄り添おうとしているのは、そうした自分自身が眞三
 郎さんとの関係でもがき苦しんできた経験と無関係ではないだろう。かの女は必要があれば、そのか
 れを病院に連れて行くし、「お金はないけど、食事、あんたの分くらいあるから食べに来てねー」と
 声をかける。眞三郎さん亡きあとに残っている闇に向き合い、ともに光の方へと歩いていくために、
 模索がつづいている。

3―2. 伊佐真次さん（次男、一九六二年生まれ）

伊佐真次さんは、二〇二〇年一月二四・二六日に沖縄で公演された劇団石（トル）のひとり芝居
 『キャラメル』を提案し、その企画と運営を中心となつて担った【図2】。かれにこうした行動を起こ
 させた背景には、以前から父・眞三郎さんから聞いていた慰安婦の話とそこにかれが込めていた思い

があった。

二〇一九年八月三日、朝鮮人元慰安婦の一生を描いた同作品の公演を沖縄で企画した背景には、国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」（同年八月一日～一〇月一四日）の慰安婦をモチーフにした「平和の少女像」の展示が中止されたことがある。それまでも元徴用工の訴訟をめぐって日韓関係が悪化し、嫌韓感情を露にする言論が横行する状況を「事実がわからないからそういうのをやるんだろう」と眺めていたかれは、「平和の少女像」の展示中止を受けて沖縄でもなにか行動を起こさなければと思いはじめるようになったという。そうしたときにふと思い起こされたのが、沖縄戦での「集団自決」が日本軍の命令や強制によるものであったという記述の削除・修正を行うとした教科書検定をめぐる問題を知ったときに、眞三郎さんが自身の戦争体験——それまで語ろうとしてこなかった朝鮮人慰安婦の存在について——を語り出したことだった。⁽¹²⁾ つぎのように話をつづけている。



【図2】2020年1月24・26日に沖縄で開催された、劇団石 ひとり芝居『キャラメル』のポスター

眞三郎さんが、「いや、違う。おれも見ているんだ」っていうことをぼつりぼつりと話し出してきた。うん、だから、ちゃんと見ている人はいるのに、歴史改竄するというね、歴史は変えられるはずなのにそういうふうにしてしまおうという流れがあるから、そこはきちつとね、(『キャラメル』を) 観るべきじゃないかという気がした。⁽¹³⁾

『キャラメル』が沖縄で公演されるまでの過程を見てみてもわかるように、真次さんは戦争を繰り返さないために行動した眞三郎さんの意志を継ぐ一人だといえるだろう。二〇〇七年からヘリパッド建設に対する座り込みをはじめ、二〇一四年から東村議会議員となり、現在二期目を迎えていることは、その一端を示している。だが、眞三郎さんとは幼少期から建設的な関係が築けていたわけではなかったという。

ぼくらが小さいときは、独裁者さ。「おれの言うこと聞け！」みたいな。口ごたえはできなかったよ。⁽¹⁴⁾

たとえば、食事をするときも「うるさい」といわれるため、しゃべることは許されなかったそうだ。

さらにこうした家のなかのルール以外にも、眞三郎さんの「冷酷」な側面を垣間見てもいい、かれに恐怖を感じることがあった。大雨が降っていたある日のことだ。雨どいがタンクから外れた

ままになっていることに気づいた眞三郎さんは、まだ小学生の真次さんに「あれ直して来い、なんであんななっているか」と、修理を命じた。真次さんは結局一人で直しきれなかったというが、なんの説明もなしに「おれのせいみたいになっている」ことに内心納得がいかなかったという。また、別の雨降りの日には、飼っていた犬を野ざらしにしていたのを見つけた眞三郎さんが、「こんな犬の飼いをするのなら、殺しなさい」といって包丁をぱつと差し出したという。「殺せ」ということばが咄嗟に口を衝いて出たうえに、包丁まで手渡そうとした父親に、真次さんは驚き鮮烈に記憶していた。

こうして幼少期の記憶から眞三郎さんの姿を思い出すなかで、いつも「かれのご機嫌を取らないといけないかった」当時の状況がありありとよみがえってきたのだろう。真次さんは、母・喜美子さんがかさねてきた苦労を思い起こしてこう語った。

厳しかったから、あいだに挟まれていた母親は大変だっただろうな。それでぼけてしまったというのはあるだろうな。苦しみから逃げたいから。それでぼけた方が、いま幸せだと思⁽¹⁵⁾う。

そのかの女は現在、植物状態になっているという。眞三郎さんとのことを聞くことは、もう叶わないだろう。

そうした状況を察してか、遠くに視線を向けながら「いろいろあっただろうね！おれはわからない

い」というも、すぐさま「なにかがあつたんだろうと思うとき」があつたと話をつづけた。眞三郎さんとドライブに行くことになり、姉と一緒に車に乗せられたときのことだ。走り出してすぐ結構なスピードを出しはじめ、姉が「やめてやめて、怖いよ怖いよ」と必死に呼びかけていたというが、かれには聞こえていない様子で、車を飛ばしつづけていたという。「むしろしゃするなにかがあつたんでしょね」と、眞次さんは振り返る。

その「なにか」が語り出されることがなかったとしても、わからなかったとしても、そこにある「なにか」を感じながら、眞三郎さんのすぐ傍で生活しつづけるなかで自らの生き方を模索つづけてきたのだろう。自らが担当しているある新聞のコラムに、眞三郎さんの死後、二回にわたって追悼文とも読める文章を寄せている。そのなかに、こんなことばがある。

生き地獄の様相は他人に話せないこともあつただろう。それこそ墓場に持つて行つたのではないだろうか。伝えたいけれど、辛くなるから伝えられないなんて……⁽¹⁶⁾

「戦やならんどー」何度でも伝えよう。⁽¹⁷⁾

3-3. 伊佐育子さん（次男の連れ合い、一九六〇年生まれ）

伊佐育子さんは、晩年、認知症が進行する眞三郎さんを自宅で介護した。一九八五年に次男・真次さんとの結婚を機に沖繩に移住してから、漆職人として家業を支えてきた。そのなかで、眞三郎さんを取り巻く家族の関係を見てきただけでなく、かの女自身もそれに巻き込まれながら生活を築いてきた。

インタビューのはじめに、育子さんから見た眞三郎さんはどんな人だったのか聞いてみた。⁽¹⁸⁾「真面目な」「しゃきつとした人」だったという。かれの葬式には、お金を借りていたという人たちが何人も返しに来ていたそうだ。なかには、三〇年以上疎遠になったまま返せずにいた人もいたという。そうしたかれの面倒見のよさは、政治運動のなかでもよく知られていた。

だが、家庭内の話に踏み込むと、かれの姿はだいぶ違ったものに見えてくる。育子さんによれば、家族に対しては「命令ばかりだった」という。⁽¹⁹⁾とくに、眞三郎さんと長男（育子さんにとって義理の兄）のあいだでは、衝突が絶えなかった。眞三郎さんは思うようにならないと、「いろんなものを投げだしたり、ガラスが割れたり」「ものに当たった」。そして、話し合いができない関係だったため、義兄も工場ものを壊していたという。まわりはどうすることもできなかったのだろう。義母・喜美子さんにその後片付けをいつけられた育子さんは、眞三郎さんが気づくまえに掃除するようにしていたという。

育子さんは、その喜美子さんから日頃から眞三郎さんにまつわる苦勞話をいろいろと聞かされていた。かれの政治運動のかかわり方については、こんな話をしていたようだ。

選挙になったら自分のおうちが「使え使え」選挙事務所になって（笑）。チラシがいっぱい来たり、もうおばー（＝喜美子さん）はその人たちの食事を……、「もう一軒おうち建てられたー」とか。「ビール買ってきなさい、あれ出しなさい」っておじー（＝眞三郎さん）に言われるままに、苦勞していた人だから。そういう面では、おばーはすごい苦勞して、ね、おじーのためにしていたなーってあるけど、他に對してはすごい、面倒見たり、自分の惜しまず、やっていた人だなーって。²⁰

ほかにも、眞三郎さんが生まれたばかりの孫を抱いたときは、「赤ちゃん抱いたことないのに」とか、「子どもは抱かないくせにー」、「またやってるさー、はじめて抱いてるさー」などと喜美子さんはよく愚痴をこぼしていたという。

だが、こうした義母の気持ちを受けとめたうえで、育子さんは眞三郎さんが「子どもを抱いている暇もなく、忙しい時代」を生きてきたのだろうと思ひめぐらせ、「戦中戦後、ほんとに戦に翻弄された人生」として記憶しようとする。かの女がそう思えるのは、眞三郎さんの介護しながら生活をとも

にしてきたからこそそのことなのかもしれない。

眞三郎さんは、八〇歳を過ぎたところから最近あったことを記憶したり、自ら判断したりする能力が徐々に低下していった。それに伴い、薄暗くなってくると、戦火のなかに一人置き去りにしてしまつた子どもの眼を思い出し、「いま、あの子はどうしているかねー」とつぶやくようになったという。その一方で、かれは近所の子どもたちに「ひもじくないか」「食べなさい、食べなさい」と声をかけ、家にはお菓子を用意していつでも遊びに来られるように眼をかけていた。育子さんは、この地域の子どもたちを大事にする姿を、戦中に助けられなかった子どもを呼び戻す姿とかさね、「あのときの……、おじーおばーの喰め喰め（＝食べなさい）攻撃はそういうことなんだよ」という⁽²⁾。

だが、そういった眞三郎さんの言動と、かれが置かれた状況を説明するということは、育子さんにとって、インタビューの場に限った話ではなかった。二〇一五年夏ごろ、眞三郎さんに沖縄戦の体験を証言してもらおうと何度も取材に来ていたカメラマンがいた。そのカメラマンは、眞三郎さんに会いに来るまえに、育子さんに電話をしてかれの状況を尋ねてから取材をするか否か決めていた。「今日は大丈夫かねー？」と聞かれて、「今日、無理そうよ」とか「全然そんな感じじゃないよ」と返事をすることも少なくなかったという。かれは、精神科医の蟻塚亮二氏からPTSDの人に対する接し方を聞いて学んでいたらしく、事前に体調を確認するだけでなく、「無理しないで切り上げ」るなど配慮しながら取材はかさねられた。眞三郎さんから証言を聞き取るのに「苦労していた」姿を、か

の女は記憶している。取材に応じていたときの眞三郎さんの姿を、つぎのように語っている。

いつも涙ながらにしゃべってたから、うん、震えながら、お話していたから。話すのにすごい
気力いるって⁽²²⁾いかな。

眞三郎さんの証言を聞こうとすると、このカメラマンがとった対応のしかたは、精神科医のアドバイスに基づいて自分なりに戦争体験者に対して配慮しながら証言を聞きだすという、ジャーナリストとして模範的あるいは善意に満ちたものだといえるだろう。だがそれは同時に、PTSDの症状としてあらわれる言動を、あらかじめ証言の枠の外に締め出していたようにも思われる。他方、育子さんは、眞三郎さんの不安定な状態をPTSDの症状として包括的に定義するのは、距離を置いたところにいた。それは、証言できる状態ではないありのままのかれの姿を受けとめ、そっと寄り添いつづけるなかで身につけられたものでもあったのかもしれない。

またほかにも、眞三郎さんは「泊りなさい、泊りなさい」といって人を家に泊めようとするのが珍しくなかったが、盛り上がってきて、三線で民謡を奏でる音が聞こえてくると、「あー、聞きたくない」、「思い出すから、よくない」と言い出すことがあったという。そういうときは、育子さんがあいだに入って、「実はこんなこんなで、おじーは思い出すみたいなんで、苦しくなってくるんで」と

いって、「やめてもらった」そうだ。思い出していたのは、「慰安婦のお姉さんのこと」なのだろうと想像する。⁽²³⁾

そうして三線の音が聞こえてくるのさえ嫌がるかれが、かつて教えてもらったという三線を弾くことはなかった。身近な家族や親戚に聞いても、かれが三線を弾いているところを見たことのある人はいなかったという。だが、二〇一七年初夏、誰もいない公民館で、眞三郎さんが三線を見つけて自ら弾きはじめたのを、育子さんは娘の歩美さんと目撃している。そこでかれは、「安里屋ゆんた」を弾きはじめたという。

おじーがその三線で、はじめてやって。うまいんだよね。今まで、聞いたことない。「おじーが三線弾いてるよ」「じょうずー」とかいつて。ぼろぼろとただけど、やっぱしやってたんだねー⁽²⁴⁾って。

かれがなぜ再び三線を弾きはじめたのかはわからない。だが、七〇年以上の年月を経てようやく三線を弾きはじめた姿からは、それまでPTSDや認知症の症状とみなされてきた言動のなかに耐えがたい痛みの記憶があったことだけでなく、ネーネーたちと過ごした楽しい時間もたしかに抱え込まれてきたことを想像させた。

二〇二〇年に沖縄で公演された芝居『キヤラメル』で、育子さんは実行委員をとめた。同作品の公演準備を進めるなかで迎えたかれの死は、かの女にこんな思いを強くさせていた。

おじーは言っていたっていうことをわたしも言わないといけない。⁽²⁵⁾

こう語る育子さんの念頭に置かれているのは、眞三郎さんが慰安婦の女性たちのことを話しはじめるきっかけにもなった教科書検定の意見撤回を求める県民大会（二〇〇七年九月二九日、宜野湾海浜公園開催）で、子どもが「おじーおばーを嘘つきにしないでほしい」と訴えたことだ。⁽²⁶⁾

聞いた以上は、言わないといけない責任あるかなーと思う。すべてがなかったことにされる。いなければもう、なかったことにされちゃう。⁽²⁷⁾

育子さんが眞三郎さんの思いを語り継いでいくということは、眞三郎さんにとって生きる死者としてあらわれ、ふたたび語りだす回路がひらかれることを意味する——それは、死者に希望をもたらすことであるに違いない。

3-4. 伊佐歩美さん（次男夫婦の長女、一九八八年生まれ）

伊佐歩美さんには、眞三郎さんとのあいだに大きくわけて二つの記憶がある。子どもころの怖かった記憶と、成人してから介護するようになってからの記憶である。

物心ついたころから住んでいた東村高江では、眞三郎さんの自宅から歩いて三分ほどの距離に両親と弟と暮らしていた。当時のことをこう振り返る。

歩美…おじーとはほとんどしゃべった覚えがなくて。怒られた、怒られた覚えしなくて。

山本（筆者）…近くに住んでたんですね？

歩美…だから行きたくないかったんだよね。団地に住んでたときに、いちいちお母さん、これを持って行つてとかお遣い頼まれるけど、あんまり会いたくないから、「いやだー」みたいな、あんまり懷いてなかったから。あんまり、思い出とか、⁽²⁸⁾

眞三郎さんの家に親族や近所の人たちが集まるときは顔を見せたり、幼稚園の送り迎えをしてもらったことはあったというが、自分からしゃべることのないかれは「怖かった」し、「好きじゃなかった」のだという。そのため、「おじーとわたしの思い出みたいなのはないね」と言い切る。

そんなかれとのつきあい方が変わったのは、高校進学と同時に那覇に引っ越してから一〇年以上の

ときを経て、二〇一五年に高江に戻ってからである。はじめは「この人、知らないぞ」と思ったが、「ほけてんだな」と認識することはできた。家にいるときに、自ら何か語りはじめることはなかったが、ときどき、普段は穏やかな様子なのが一变することがあったという。たとえば、テレビで童謡「ふるさと」が流れて来たときに、「口ずさみながら泣き出し」たことがあった。どうして号泣しはじめたのかはわからなかったが、昔住んでいた「泡瀬を思い出」しているように、かの女には見えたそううだ。

他にも、飼いはじめたばかりの子犬が玄関で「キャンキャン」と鳴いていたときに、眞三郎さんが「キレて、スリッパでクワーツ」と叩きはじめたことがあった。

「お客さんが来たら玄関に犬がいるなんて恥ずかしいだろう！」って。顔真っ赤にしてあんな顔、ぶちギレてた。あれは怖かった。²⁹

「急にキレたり」「強迫観念」に囚われたりする姿を何度も見てきたかの女は、「トラウマとかがあった」のではないかという。

そんなかれと亡くなる一年前まで一緒に暮らした。かれは一人であることを怖がった。「どこにも行かないでよー」といい、少しでも寂しい思いをしたら「ひどいことされた」とか「君はぼくをいじ

めるね」とかの女に不満をぶつけた。眞三郎さんとの共同生活を通して、歩美さんは少しずつかれに対する自分の気持ちの変化を感じていくようになる。

最初はいく感じたけど、ああいう認知症の人と暮らすって大変だなーと思ったね。振り回されるじゃん。なんでもこの人優先でしなきゃいけないんだって思うと、自分を犠牲にしないといけないくなる。自由がなくなる。こんなに不自由、っていうか、苛立つんだ、みたいな。はじめて知ったし。⁽³⁰⁾

かれが認知症かもしれないことは知っていたが、言われたことに対して「言い返し」たり、「普通にけんかし」たりしていたという。歩美さんは、一人の人として眞三郎さんに接しようとしていた。だが、かれがかの女に関心をもつことはなかったため、「ネーネーはどういう仕事してるの？」などと声をかけられたことはない。

眞三郎さんを中心として生活し、さらに自分の求めるようなコミュニケーションがなかったことに対して不満がなかったわけではない。だが、一緒に過ごしたからこそ得られたものもあったという。

その思い出の一つに、運動にかかわるものがある。二〇一六年七月、全国から派遣された機動隊によってヘリパッド工事が再開され、大型トラックが一日に数十台から多いときは一〇〇台以上搬入さ

れていた。そんななか、歩美さんは当時手伝いをしていた工場の前の県道沿いに弟と従弟と一緒に立ち、「山原の森を皆で守ろう」と書かれたプラカードを掲げて手を振る活動をはじめた【図3】。眞三郎さんが工場に来ていたときは、近くに椅子をもってきて座らせて、一緒にアピールした。いわれた通り素直に応じてくれたのは、かれが「それが平和活動だつてわかつてい」たからだろうという。そのときにかれから言われて、いまも心に響いていることばがある。

このたたかいは勝ち負けじゃないさ。国のやり方に抵抗した、その意志の表示が大事。⁽³⁾

それまでは「無力だなー、どうせ意味ないけどねー」と目的意識はありながらも、自分がやっていることに意味を見出すことができなくなっていた。だが、このことばをかけられたことで、「やっつてることに無力感を感じなくてもいい」と思えたという。

そうして眞三郎さんの傍らで過ごした時間を通して、歩美さんは眞三郎さんが沖縄戦で経験したことや反戦平和の運動のなかで伝えようとしてきたことを知ってきた。その経験を今後の行動にどうつ



【図3】歩美さん手づくりのプラカード

ないでいきたいか、インタビューの最後に尋ねてみた。

そうねー、いまはまだないけど、（……）もし子どもができたとかそういうときに、平和のこととか戦争のことを伝えるときにおじーのことをいつたりするかもしれないね。だってもう、うちの家族には戦争体験した人はいないわけでしょう。そうだよ、歩美がおじーに、おじー・おばーに聞いた話をつぎの世代は聞けないわけだから。それを、わたしはいまでも覚えてないのに、思い出しなげらしゃべったりしないといけない。⁽³²⁾

歩美さんは、覚えていないのに思い出すことができるのか不安に思っていた。しかし、眞三郎さんの死を受けとめようとするなかでよく聞くようになったという「ラッパの葬式」(THE BASSONS, 二〇一九)という曲は、そんなかの女を勇気づけた。ラッパ・DARTREIDERが歌っているのは、死んだ人(の記録——たとえば、レコードやCD、映画など)を再生するとよみがえるというものだ。かの女はこの曲に出てくる「再生する」ということばを「思い出す」という動詞にかさねて聞いている。そして一通り話し終えたあとで、かの女は、わたしが眞三郎さんの家族にかれのことを聞き、記録してきたことも、「再生」につながる行為として受けとめてくれた。それは、眞三郎さんを再生するという営みのなかに、わたし自身もいることに気づかされる瞬間になったように思う。

歩美さんのなかにも、かれのことばやしぐさ、運動に込めてきた思いが、断片的であったとしても刻み込まれている。かれとの記憶を体内に取り込んだかの女は、これから何度でも眞三郎さんを再生することができる。かれとの対話をつづけていくことができるのである。

4. 弔いの場を考える

眞三郎さんが沖縄戦で遭遇した人たちのことをうまく弔うことができず、どうにもできずにいたときに、かれの家族がどのようにかれのありのままの姿を受けとめ、かれがともに生きる死者を迎え入れてきたのかということを見てきた。だがこのように、いまは亡き眞三郎さんが思い起こされるとき、そこにはかれが亡霊となつて家族のもとを訪れ、いまも生きているという証を立てる姿を看取することもできるのではないだろうか。かれにとっては、インタビューの場も一つの証言の場であり、弔いの場でもあったかもしれないのである。

洋子さんの話では、幼少期に泣き声を上げたら眞三郎さんの手が反射的に出てきたというし、育子さんの話では、晩年、夕方になると怖がる素振りを見せることが増えたという。自分が泣いていたのを聞いたり、暗くなってきたりしたときに、眞三郎さんは戦中に助けてあげられなかった乳飲み子の声を聞き、その眼を見ていたのだらうと、二人はそれぞれに思いめぐらせていた。また、三線の音を

拒絶したり、民謡を聞くと涙があふれたりしてしまふ眞三郎さんの姿を見た育子さんは、慰安婦と足された女性たちが受けていただろう痛みを知ることもなく、自分だけが楽しい思いをしてきたことを後ろめたく思う気持ちを汲み取っていた。眞三郎さんの傍らにいた者たちは、眞三郎さんがともに生きる亡霊を拒むのではなく、まずその語りに耳を傾けようとしてきたことがうかがえるだろう。

くりかえしになるが、眞三郎さんの家族はかれのもとに訪れた亡霊たちを歓待し、かれとともにいつづけてきたのである。眞三郎さんの混乱した言動には、亡霊となつてあらわれる者たちとともに生きてきた痕跡が残されていた。それ自体も重要なことだが、その傍らにいた家族という第三者の存在があったからこそ、それは消し去られずに記憶されてきたということも忘れてはならないだろう。

こうした家族にとっての弔いを記憶実践として語りなおすときに問われるのが、ことばにならない領域をどう記憶するのかということだ。これをいったん亡霊から離れて考えてみたい。手がかりとなるのは、「慰安婦」ハルモニたちのつぶやきを「想起すると同時に記憶をさらに深くからだにしみこませ」ていく必要性を語った、李静和のことばである（一九九七「一九九八」）。李が提示しようとしたのは、相手を抱きとるといふ態度からはじまる関係性であり、他者の経験を分析したり解説したりするのは異なるものであった。眞三郎さんの家族が、眞三郎さんだけでなく、かれがともに生きてきた死者たちを迎え入れ、亡霊たちとの対話の場をひらいてきたことは、李が相手を受けとめるといふことを記憶行為の前提に据えようとしたことにも通じるだろう。

ここまで家族にとつての弔いを考えてきたが、眞三郎さんがどのように亡霊に身を委ね、弔いつづけてきたのかということに立ち返りたい。そこには、眞三郎さんの経験を書くときに、過去の出来事を思い出すという表現が、実態にそぐわない的外れなものではないか——つまり、かれにとつて「思いだす」ということは能動的な行為だったのか——という問いも絡んでいる。というのも、眞三郎さんは、自分では抗うことのできない力によつて、「あのとき」に引き戻されてきたように見えるからだ。原爆体験者たちの証言の場に立ち会つてきた直野（二〇一五・一七三）も、「たとえ現在を生きようとしても、否応なしに、死者が在る時空間に連れ戻されてしまう」と指摘しているように、眞三郎さんにとつても亡霊に訪れられ、思い出させられるなかで、沖縄戦の死者たちとともに生き延びつづけてきたのかもしれない。かれは、亡霊たちを思い出す側であると同時に、かの女／かれらに訪れられ、思い出させられる側でもあった。それは、眞三郎さんが生きる死者の声を聞きながら、ともに生き延びたということに留まらず、かれが想起されることによつて、死してなお沖縄戦の亡霊とともに生きつづけているということでもある。

しかもかれが暮らしてきたのは、沖縄戦のあと一九七二年まで米軍の占領下に置かれ、そのちも米軍基地・軍隊の機能は着実に強化されつづけてきた基地の島だ。島のどこに行つても、戦争を忘れることなどできない風景が広がっている——そして、それはいまも変わっていない。そこで生き延びてしまった者たちは、その風景からなにを読み込んできたのだろうか、そこから降りかかってくるの

は、どんな記憶だったのだろうか。過去と現在がきれいに区切られていない場所に身を置く者が、「あのとき」を思い出してしまうとき、それはきっと決して抗うことのできない力に身を委ねるほかなかったときだったのではないだろうか。

これは、川村が想起する側とされる側の主客がすりかわっていくことに注目していることも、無関係ではない。川村は、生者が死者に巻き込まれ、「亡霊の位置に転位させ」られることによって、その声を聞き、またそれに応える営みに「弔い」という行為を読み取ろうとしていた（二〇一三・三七―四一）。これを踏まえて、トラウマ・PTSD・認知症の症状とみなされてきた眞三郎さんの言動に眼を向けると、沖縄戦にまつわるイメージや出来事のなかから不意に訪れる亡霊たちの声を聞き、かの女／かれらにその身を明け渡すほかなかったかもしれない可能性も浮かび上がってくる。忘れられない出来事のなかの幻影に憑りつかれたかれは、その人たちと一緒にこの世をさまよっていたのかもしれない。誤解を恐れずというならば、かれが混乱した言動を見せるとき、それは亡霊となつてよみがえる死者たちを弔う、あるいは弔いなおそうとする瞬間でもあったのだろう。

ここまで、眞三郎さん自身が死者たちとのあいだに結んできたかもしれない関係性を考えてきた。だが、眞三郎さんのことを思い起こすときに頭をよぎるのは、眞三郎さんもまた周りにいるほかの連れかを傷つけつけてきた一人だということである。とくに、かれの連れ合いである喜美子さんの立場を想像すると、眞三郎さんの家父長制的価値観も相まって、清算しきれない気持ちの重くのしか

かってくる。だがそうだとすると、眞三郎さんを想起するときに、かれを一方的に批判したり正義を説いたりすることによって尊厳を傷つけることは、はたして許されるのだろうか。わたしたちがすべきは、経験を解説することではなく、傷を抱えたまま生き抜いてきたということに耳を傾けるということを通して、すでに語りえぬ死者たちの尊厳を尊重するということに尽きるように思われる。

だがだからといって、眞三郎さんが家族に見せてきた混乱や破壊を含んだ言動を、弔いという視点から書き留めればそれで問題が解決するというわけでもないだろう。かれの家族は、かれのことばや振る舞いによって傷つけられてきたし、苛立ったり、うんざりしたりすることも往々にしてあったという。眞三郎さんが沖縄戦で深い傷を負ったからといって、より弱い立場の人たちに暴言暴力を振るったり、自己中心的なふるまいを押し通したりしてきたことは決して擁護できるものではないし、かれとともに生活するなかで、それぞれのなかに降り積もってきた感情をなかつたことにしてしまうのも違うだろう。

だからこそ、そのことを十分に考慮したうえで、眞三郎さんの言動がすぐさまどんな意味をもっているのかわからなかったとしても、ともに時間経過していくなかで少しずつわかってきたということの重要性に眼を向けたいのだ。傍らにいたからこそわかってきたことあれば、わからないまま抱え込みつづけなければならなかったこともあるだろう。しかしそうしてかれのすぐそばに身を置きつつけてきたからこそ、かれの厄介な言動に巻き込まれながら、同時にかれとのあいだに起きたこ

とを自らのうちに留めておいて、くりかえし問うということにもつながってきたのではないだろうか。ジュデイス・バトラーは、わたしたちが試みるどんな説明も超えていくものとして生を理解し、（答えを与えることで）満足しようとするのではなく、問いをいつまでもひらかれたままにしておくことによって、他者を生かすことにもつながる、と述べている（二〇〇五・四三「二〇〇八・八一」）。つかんだ問いに自らをかわらせながら問うことを放棄しないということが、かれとの関係をつづけてきたことの証であり、死後においてもそれはつづいている。そうして問いがひらかれたまま問われつづける限り、かれはわたし（たち）のもとに亡霊となつてあらわれ、生きつづけていくことができるのである。

したがって、こう考えることもできるだろう。眞三郎さんの家族は、かれの傍らで日々生活するなかで、沖縄戦の戦場からくりかえしかれのもとに訪ねてくる亡霊たちを迎え入れてきたのであり、そのあり方自体が、弔いの場をつくることにつながっていたのだ、と。そしてそれは、眞三郎さんが亡霊との対話をする傍らとともに弔おうとすることからはじまり、かれの亡きあとは、かれを想起することによって、かれ一人だけではなく、そこに抱え込まれてきた複数の死をとともに弔いつづけていくことにもなるのである。

5. おわりに…呼びかけられ、言葉を託された感覚から

わたしには、眞三郎さんが慰安婦の「ネーネー」について話すのを、一度だけ聞いたことがある。二〇一六年の夏のことだったと記憶している。米軍基地ゲート前で座り込む合間に眞三郎さんの自宅に立ち寄っていた私は、かれに急に呼びかけられたのだ。「これだけは話しておきたい」とはつきりした口調でいって、幼いころに家族・親族と墓参りに行ったときに撮ったという写真を見せられた。そしてそこに写っている二人の若い女性を指さして、かの女たちが朝鮮から連れて来られたことを教えてくれた。わたしはここぞとばかりに二三質問したが、かれはその写真をじっと見つめたまま少しだけ自分の話をつづけ、わたしたちは嘸みあわないやりとりをほんの数秒間交わした。あのときのかれの話は、決して証言らしいものではなかったが、「これだけは話しておきたい」とかれがいいだしたことは、記憶として色濃く刻みつけられ、何かを託された感覚はいつまでも残っていた。

それからしばらく経って、眞三郎さんは二〇一九年秋にこの世を去った。お葬式に参列したわけでもなく、手を合わせて祈る気持ちにもなれず、弔い損ねて宙ぶらりんの気持ちを抱えたまま、翌年一月に沖縄に行った。そこで、劇団石（トル）の一人芝居『ギャラメル』を観たのである。朝鮮半島で生を受け、日本軍従軍慰安所で「慰安婦」にさせられた主人公・オクスンの一生が目の前で生きなおされ、物語の最後にはかの女の死を悼む儀式に立ち会うことになった。その舞台を観ながら、元慰安

婦の女性（たち）が生きてきた時間とその死が、それぞれの旋律を奏でながら、眞三郎さんにとってのそれと重なり合うようにして送り届けられた気がした。その不思議な感覚に包まれながら、かれのことをようやく弔うことができたような安堵感を覚えたのである。

だがそれから、眞三郎さんのなにを知っていたのかという問いにとらわれはじめた。死という断絶を受け入れてはじめて、沖縄戦体験者という肩書だけでかれのことを理解したつもりになっていたかもしれないことに気づかされたのだ。こうして、あのときの託されたという感覚をどうしていくかということは、再び問題化された。その託された感覚につき動かされるようにして、眞三郎さんの経験してきたことを拾い集めてみようと、かれの家族のもとにかれとの思い出話を聞きに行きはじめてたのである。

本稿では、その眞三郎さんの最も近くにいた家族のナラティブを通して、かれの死後にどのような記憶をたぐりよせていくかという問いを出発点として記述し、そこから浮かび上がってくる弔いの場を描き込んでみた。そこには、弔いの場からはじめることによって、既存の記憶の継承という営みを解きほぐすための一つの方法を提示できるだろうという仮定が、用意されていたように思われる。だが、弔いの場に降り立ってみてわかってきたのは、その検証に留まるものではなかった。というのも、死者を思い出して語るということは、死者と生者間の対話であるかもしれない——少なくとも両者によって、相互的にコミュニケーションを図ることが試みられている——行為であり、しかもそれ

が、想像以上に豊かな関係性の連なりを生み出してきたかもしれない可能性として浮かび上がってきたからである。

このことを踏まえたくて、あらためて眞三郎さんから記憶を託されたという感覚を契機として、かれの家族にかれとの思い出を聞かせてもらおうようになった過程をたどりなおしてみる。するとそれは、わたしの意志によってというよりも、むしろ眞三郎さんが自らの生きてきた軌跡をかき消そうとすることばに抗うために、わたしのことを訪ね歩かせていたようにも見えてくる。そうして家族によって語られる記憶が、たとえかれにとって耳をふさぎたくなるようなエピソードや、生々しい痛みや身体感覚を伴うものであったとしても、それも含めてかれはわたしに記録させようとしていたのかもしれない。ここに記したことは、果たして眞三郎さんの弔いになるのか。亡霊たちとの対話はつく。

【注】

- (1) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年四月一日、米軍北部訓練場ゲート前にて実施）より。
- (2) 屋良洋子さんへのインタビュー（二〇二〇年四月一日、東村の洋子さんの自宅にて実施）より。
- (3) 戦争当時のかれはいわゆる軍国少年であり、「ヤマトに乗りたい」といったり、海軍少年志願兵になることを心に決め、友人らと腕に「土」を彫り、死ぬときは土の上でとたがいに誓っていたという——その

痕跡は、晩年になっても消えずにその腕に刻まれていた。

(4) 伊佐育子さんへのインタビュ (二〇二〇年一月三十一日、米軍北部訓練場ゲート前にて実施) より。

(5) 眞三郎さんの連れ合い・喜美子さんもまた早くに父を失っていた。さらに、小学生のころに弟二人を連れて母が大阪に出稼ぎに行ったことから、「親に捨てられた」という思いを抱えつづけていたという。屋良洋子さんへのインタビュ (二〇二〇年四月一日、東村の洋子さんの自宅にて実施) より。

(6) 本土に「復帰」すれば、海を越えて安価な家具が入ってくることが予想されたからこそその判断でもあったのだろうが、眞三郎さんはのちにトートーメーをつくりはじめたきっかけを「沖縄戦でなくなった人たちを慰めるため」とか、「トートーメーがないとかわいそうでしょ」とかいつていたと記憶している。伊佐真次さんへのインタビュ (二〇二〇年一月二三日、東村の真次さんの事務所にて実施) より。

(7) 伊佐育子さんへのインタビュ (二〇二〇年四月一日実施) より。

(8) 伊佐真次さんへのインタビュ (二〇二〇年一月二三日実施) より。

(9) 伊佐育子さんへのインタビュ (二〇二〇年一月三十一日実施) より。

(10) 屋良洋子さんへのインタビュ (二〇二〇年四月一日実施) より。

(11) 同上。

(12) 慰安婦と集団自決が直接的に関係する話であるわけではないが、歴史的な事実が消し去られようとしている状況に対してそれを暴力として感じ取り、証言することによってなかったことにさせまいとしていたことを

読み取る必要があるだろう。

- (13) 伊佐真次さんへのインタビュー（二〇二〇年一月二三日実施）より。
- (14) 伊佐真次さんへのインタビュー（二〇二〇年一月二三日実施）より。
- (15) 伊佐真次さんへのインタビュー（二〇二〇年一月二三日実施）より。
- (16) 伊佐真次（二〇二〇）「やんばるノート（99）…反戦を貫いた父」（二月二五日）『平和新聞』…五。
- (17) 伊佐真次（二〇二〇）「やんばるノート（100）…骨つばがないのは」（二月二五日）『平和新聞』…七。
- (18) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年四月一日実施）より。
- (19) 育子さんも京都から越してきてまもないころにあった選挙の準備で、「仕事はもういいから、チラシ配ってきなさい」と新三郎さんから言われて、近所に配りに行くようになっていた。しかし、命令されてやっていただけという受動的な態度がみられるだけではないようにも思われる。というのも、かの女自身、そうしたかれの党活動をすぐ傍でみながら、「社会のため」、「戦争しない党だから」といつてたんと取り組む姿を記憶に留めているからだ。話を聞いていると、はじめは驚き、理解できないこともあったかもしれないが、次第にかれの思いに気づき、自らのやるべきことをみつけていったかのような印象さえ受けた。
- (20) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年四月一日実施）より。
- (21) 注目したいのは、かの女が、生活のなかに突然顔を出すこうした「異常」な言動を、いわゆる認知症の症状や沖縄戦によるPTSDとしてすぐさま問題にしたわけではなかったということだ。だからこそ、そうした

言動が出てくるたびに、かの女はそれを眞三郎さんが沖縄戦で体験したことをたぐりよせる契機とすることもできたのだろう。ほかに、暗くなってくると「怖い、怖い」と言い出したり、戸締りの確認を何度も行いカーテンを隙間なく閉めたり、蠅が飛んでいると叩き殺すまで気が済まなくなったりすることも目立つようになった。眞三郎さんの沖縄戦によって負った傷を思わせる言動、およびそれに対するかれの家族の解釈については「特権化された沖縄戦体験者の問題——「狂気」の在処を問いなおす」（山本、二〇一九）でも触れているため、これ以上の説明は割愛する。

(22) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年一月三十一日実施）より。

(23) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年四月一日実施）より。

(24) 同上。

(25) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年一月三十一日実施）より。

(26) 同県民大会で実際にあった発言は、この通りのものではない。しかし、育子さんが当時聞いたことをどう解釈し記憶に留めていたかということに重きを置き、インタビューでつかわれていたことばをそのまま表記することとした。以下、かの女が記憶していたものと思われる、沖縄県立読谷高等学校の照屋奈津美さん（当時）の発言を一部引用する。参考にされたい。

分厚い教科書の中のとった一文、たった一言かもしれません。しかし、そのなかには失われた多くの尊いものがあるのです。二度と戦争をくりかえしてはいけないという沖縄県民の強い思いがあるので

す。教科書から集団自決の本当の記述がなくなれば、つぎは日本軍による集団自決の記述まで消されてしまう心配があります。嘘を真実と言わないでください。わたしたちは真実を学びたい。そして、つぎの世代の子どもたちに真実を伝えたいのです。

〔教科書検定意見撤回を求める県民大会——資料編〕、二〇〇七）

(27) 伊佐育子さんへのインタビュー（二〇二〇年一月三十一日実施）より。

(28) 伊佐歩美さんへのインタビュー（二〇二〇年四月七日、那覇市内の公園にて実施）より。

(29) 同上。

(30) 同上。

(31) 「こころへ帰ってきた」（二〇一七）『平和新聞』（二月二五日・一月五日付）…五。

(32) 伊佐歩美さんへのインタビュー（二〇二〇年四月七日）より。

【参考文献】

川村邦光（二〇一三）『弔い論』青弓社。

『教科書検定意見撤回を求める県民大会——資料編』（二〇〇七）「九・二九県民大会」ビデオ制作委員会（シネマ沖縄）。

総務省統計局 (二〇一九)「結果の概要」最終閲覧日二〇二一年七月十五日 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2019np/pdf/gaiyou.pdf>

直野章子 (二〇〇四)『岩波ブックレットNo.627 「原爆の絵」と出会う——込められた想いに耳を澄まして』岩波書店。

直野章子 (二〇〇八)「原爆被害者と「心の傷」——トラウマ研究との対話的試論」三谷孝(編)『戦争と民衆——戦争体験を問い直す』旬報社：八五—一二一。

直野章子 (二〇一一)『被ばくと補償——広島、長崎、そして福島』平凡社。

直野章子 (二〇一五)『原爆体験と戦後日本——記憶の形成と継承』岩波書店。

山本真知子 (二〇一九)「特権化された沖縄戦体験者の問題——「狂気」の在処を問いなおす」『九州コミュニケーション研究』第一七号：六三—七七。

李静和 (一九九七)「つぶやきの政治思想 求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの」『思想』一九九七年六月号 (=一九九八年李静和『つぶやきの政治思想』青土社)。

Butler, Judith (2005) *Giving an Account of Oneself*. New York: Fordham University Press (=二〇〇八年佐藤嘉幸・清水知子訳『自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判』月曜社)。